

# 木村幹著 『全斗煥 数字はラッキーセブンだ』

ミネルヴァ書房, 2024年

「全斗煥」と聞き、どんな人物像を思い浮かべるだろうか。ほとんどの人が、「下剋上で権力を奪った、無慈悲な独裁者」というイメージではなからうか。1979年10月の朴正熙大統領暗殺から肅軍クーデター、翌年の戒厳軍による光州の虐殺まで日本でも連日、大きく報道された。当時、大学生だった私は、刻々と変わる隣国の情勢に息をのんだ。映画「ソウルの春」で主役を務めた名優ファン・ジョンミンの顔や、ふてぶてしい態度が、全斗煥と混じり合って浮かんでくる。

国軍保安司令官で少将だった全は、朴暗殺事件の捜査責任者となり、「血塗られた権力への階段」（本書第II部のタイトル）を駆け足で上っていった。韓国でも全は「最も嫌われた大統領」であり、進歩紙『ハンギョレ』は2021年に全の死を伝えた記事で元大統領を呼び捨てにして「虐殺者、反省なく死亡」と書いた（「はじめに」）。

## 功罪、冷静に描いた評伝

本書は、全斗煥本人や彼を継いだ元大統領の盧泰愚、そして側近らの回顧録や、政界関係者、ジャーナリストらの証言、公的文書、日韓の新聞報道などを詳細に検討し、全の実像に迫った評伝である。回顧録の細かい部分についてまでも、他の著作の記述や当時の客観的情勢などを組み合わせて検討し、その真偽を見極める。政治史の分野で実績を積んできた著者は、本書を「彼の生涯を通じて見た『一つの韓国史』」でもあり、全の生涯を学術的な観点からまとめた著作は、日韓英どの言語でも存在しない（「あとがき」）と言う。全斗煥は何を成し遂げ、何を歴史に残したのか。韓国の現実政治から距離を置くことのできる日本の研究者だからこそ、全の功罪を冷静に描くことができたと言える。

なお、本書を研究史の中でどう位置付け、学問的にどう評価するかに関しては、新聞記者出身の私には手に余ることをお断わりしておく。興味深かった点を紹介したい。

「数字はラッキーセブンだ」という副題は、いささか謎めいている。どういうことか。新憲法制定に際し実務を担当した検事出身の朴哲彦の回顧によると、大統領の任期を決めるにあたって、全が突如、発した言葉だった。任期6年という方針を聞いた全は、「こっちの方が縁起が良いではないか」とラッキーセブンを主張し、朴は反論できなかった（218ページ）。著者はこの言葉から、全の明るい開放的な性格と抑圧的な体制が見て取れると言う。独裁者の「鶴の一声」が、第五共和国の政治制度の骨格を決めてしまった。ただ、任期中に再選を可能とする憲法改正が行われても、在任中の大統領には適用されないとの規定が付け加えられたのは、救いだった。「最も嫌われた大統領」が、憲法通りに政権を1期限りで終え、平和的に引き継いだのは、「功績」の一つと言えるかもしれない。

## 姻戚関係や士官学校での人脈を生かす

本書は三部構成で全の生涯を描く。

第I部は、「スラム街から高級将校へ」。慶尚南道の貧しい農民の子として生まれ、一家で旧満州に移住するが失敗、大邱で少年時代を過ごした。陸軍士官学校を卒業し特殊戦部隊のパイオニアとして頭角を現し、朴正熙の信頼を得て48歳で国軍保安司令官に抜擢されるまでを描く。そこでは姻戚関係も含めて軍隊における様々な人脈が有利に働いた。

全は、本格的な4年制の士官教育が始まった陸軍士官学校の11期生で、盧泰愚ら同期と「五星会」

という親睦団体をつくった。これが「ハナ会」に成長し、のちの第五共和国につながる人脈となったという。韓国社会では、物事を進めたり出世したりする際、日本よりもはるかに親せき関係や学校、地域のつながりなどの縁が大切なことがよく分かる。

陸士卒業時の成績は、156名中、126位で明らかに劣等生だった。そんな全が、飛躍のチャンスと考えたのが空挺部隊への志願だった。米国への二度の短期留学を経て、特殊戦部隊の草創期における先頭走者の地位を占める。自らの可能性と限界を知り、最大限、能力を生かすには何をすべきかを考える。全の賢さがうかがわれる経歴だ。

大きな転機となったのが、ベトナム戦争だった。朝鮮戦争で実戦経験をしていない全にとって、参戦は望むところだった。陣頭指揮で作戦を成功させ、「乙支武功勲章」を受けた。帰国後は、第一空挺特殊戦旅団長に任じられ、やがて准将、つまりスターとなった。順調に昇進を重ね、歩兵第一師団長時代には、北朝鮮による「第三トンネル」を発見した。数々の戦果を挙げ、79年3月、国軍保安司令官に就任。軍内であらゆる情報を統括するこの地位こそが、権力の階段を上るうえで決定的に重要だった。

### 「治安悪化の背後に北の脅威」という言説

第II部の「血塗られた権力への階段」は、朴正熙の暗殺事件から肅軍クーデター、5・17クーデター、そして光州事件をへて国家権力を握るまでを描く。

全が考えていた政権掌握のシナリオは、単に学生運動や労働運動が頻発し、「治安」が悪化しているだけでは条件を満たさなかった。治安悪化と北朝鮮の脅威を結びつけることが必要だった。

全の回顧録によれば、80年5月10日、日本の内閣調査室から北朝鮮による南侵敢行の情報が伝えられた。特殊戦の専門家である全は、北が特殊戦を仕掛けてくるとみた。北の正規軍が休戦ラインを越えて南侵するのではなく、「学生運動や労働争議に紛れる形で韓国国内に浸透し、韓国政府を転覆させようとする」(168ページ)という分析だった。日本からの情報については、いまさら

検証のしようがない。全が権力を把握する過程で絶妙のタイミングで起きた出来事で、できすぎた話でもある。米国政府は北の南侵説を否定した。

国軍保安司令官の全は中央情報部長署理を兼務し、すべての情報を統括し、さらに朴暗殺事件の合同捜査本部長として検察と警察を傘下に収めた。怖いものなしだった。5月17日、非常戒厳令を全国に拡大し、革命委員会とも言うべき国家保衛非常対策委員会の設置などを大統領の崔圭夏に迫る。第二のクーデターだった。

労働運動や学生運動の背後には、北朝鮮やそれに同調する勢力がいる。この言説は、今も根強く韓国社会にはびこり、一定の説得力がある。

すぐに思い出すのは昨年12月3日、大統領尹錫悦による非常戒厳宣布だ。尹は、次のように述べた。

「私は北韓共産勢力の脅威から自由大韓民国を守り、韓国国民の自由と幸福を略奪している破廉恥な従北反国家勢力を一挙に剔抉(てっけつ)し、自由憲政秩序を守るために非常戒厳を宣布します」

光州事件もそうだった。今年5月、私が光州で会った「5・18国際研究院長」で全南大学名誉教授の崔晶基は、45年前に起きた5・18民主化運動の風化を心配していた。とくに2000年代に入ってから、「5・18は、北韓工作員が入り込み市民を煽動したもの」という主張が広がり、一定の支持を得ているという。私も在日韓国人がこうした言説をうのみにしているのを知り、驚いたことがある。

今年の大統領選挙では、中国の共産勢力が不正選挙を工作しているという陰謀論も広がった。民主化されて間もなく40年になるが、分断国家であるがゆえに、依然として人々の反共意識は根強いものがある。保守政治家はそれを巧みに利用する。しかもSNSの普及、とくにユーチューブによってウソが瞬く間に広がっている。

### 能力の限界をわきまえる賢さ

第III部は、「統治者としての全斗煥」。二度のクーデターで権力の「血塗られた階段」を上った全は、新憲法下の81年2月、大統領選挙人団によって選出され、二回目の大統領に就任、第五共和国

が発足する。経済や外交で成果を上げ、ソウル五輪誘致に成功した。しかし大統領の直接選挙など民主化を求める国民の不満は高まり、87年、与党、民主正義党代表の盧泰愚が民主化を宣言した。政権の腐敗も明らかになり、国民から非難を浴びた。自らが誘致したソウル五輪の開会式出席も断念せざるを得なかった。没落はあつという間だった。

全が政権を手にしたとき、経済はデフォルト寸前だったが、優秀な経済専門家を司令塔とし、物価上昇を抑えつつ高い水準の経済成長を達成した。朴正熙は、「あらゆる問題について、閣僚等から詳細な報告を求め、自らが気になる部分については、一つ一つ具体的に指示を下した」(235～236ページ)。しかし、士官学校時代の成績の悪さを隠さない全は、能力があると見込んだ専門家に任せる統治スタイルだったという。全は、ここでも自らの能力の限界をわきまえる賢さを見せた。

日韓関係も進んだ。韓国は、北朝鮮と対峙し、巨額の軍事費を支出し、日本の安全保障に貢献している。だから日本は経済協力の形でもっと誠意を見せるべきだ。こうした「安保経協」論を持ち出し、5年間で100億ドルの経済援助を日本に求めた。もはや開発途上国とは言えない隣国からの巨額の支援要請だった。個々のプロジェクトを積み上げるのではなく、安全保障と絡めて金額、先にありき、というこれまでにない要求に日本側は大いに困惑した。

日韓関係は82年の教科書問題もあり、ざくしゃくしていた。就任間もない首相の中曽根康弘は翌年1月、現職首相として初めて韓国を訪れた。経済援助は総額40億ドルとすることで妥結。84年には全が国賓として来日し、昭和天皇と会見した。両国首脳が公式に互いの国を訪れることで日韓関係は、大きく進んだ。

訪韓した中曽根は晩餐会の席で、日韓の間に「遺憾ながら過去において不幸な歴史があったことは事実」「我々はこれを厳粛に受け止めなければならない」と述べた。中曽根はこうした一連の全との会談について、2010年、朝日新聞記者に「私は民族主義者だから韓国の民族主義も理解できる」「総理大臣が『過ち』と述べて謝る。それが礼儀だという意識をもち、自分で考えたのです」

と述べている。きれいごとのような気がするが、全とはウマが合ったのは間違いはない。

だが、そのころ、私はなんとも嫌な不気味さを感じたのを覚えている。

中曽根が83年に訪米し、日本をソ連に対する「不沈空母」とするとの発言が大きく報道されたことがあった。タカ派で改憲派の中曽根に加え、対ソ強硬派の米大統領レーガン、軍人出身の全という悪役三人の反共トライアングルができた。ソウル五輪の招致も決まり、韓国の民主化を支援する日本の市民の間には、「独裁国家での五輪なんてとんでもない」という声も高まっていた。

韓国では「反日」「親日」そして「知日」に代わる新たな言葉として「克日」が登場した。キャッチフレーズは「日本に克つ為には、日本を知らなければならない」。全の側近で新聞記者出身の許文道が、古巣の朝鮮日報に依頼して展開したキャンペーンだった(253ページ)。もっとも「克日」と言う言葉は、もはや死語になってしまった。

### 「盟友」盧泰愚との因縁

第III部のもう一つのドラマは、全と盟友だった盧泰愚との関係の変化だった。

全は、士官学校同期の盧が次の大統領になれば自らは安泰であると考えていたようだ。ところが、実弟の横領、脱税問題などのスキャンダルが噴出し、全は世間の非難を浴びた。一方、国会議員選挙を前にした盧は、全を守ろうとはしなかった。全の回顧録には、自らを切り捨てようとする盧に対する怨嗟の言葉が満ち溢れている(307ページ)。

金泳三政権下、全と盧の二人は内乱罪などで起訴された。96年、私は公判を傍聴し、二人が手をつないで法廷に立つ姿に驚いた。「同類相哀れみる」ということなのか。その心境はいかばかりだったろう。2021年10月、盧が死んで約一か月後、全が後を追うかのようにこの世を去った。因縁深い二人の関係を象徴する最期だった。

日本人である著者は当然ながら徴兵経験がなく、まして他国の軍隊のことなのに、韓国軍の組織や部隊の役割、配置に大変、詳しい。こうした現場の知識を仕入れるのには、相当な努力をしたのだろう。文章は軽快であり、数々の「名場面」が生

き生きと描かれ、読む者を飽きさせない。

著者は、オーラルヒストリーのプロジェクトに取り組み、全斗煥の側近や、当時をよく知るジャーナリストらにインタビューしている。だが、「本人との約束により詳細を書けない」ため、直接の引用はせず、著者の解釈の形で示したという。記者出身の私としてあえて欲を言わせてもらえば、こうした貴重な証言の引用ができたなら、さらに臨場感あふれた読み物になっただろう。

言うまでもないことだが、映画やドラマは、史実に名を借りたフィクションである。映画「ソウルの春」をみて、肅軍クーデターで、あれほど銃を乱射した血みどろの戦いがあったと思い込んでもらっては困る。歴史の真実を知るために、韓国に関心のある若い世代のジャーナリストや外交官、ビジネスマンらにも広く読んでもらいたい。

(桜井泉 元・朝日新聞、東西大学)